



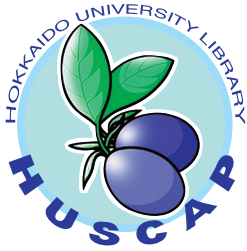
Title	HUSCAPレター 第4号 : 拝見します。「初めての論文」: 第1回 中村睦男 総長 「フランス憲法における社会権の発展」(1)、(2)、(3)
Issue Date	2007-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88225
Type	periodical
File Information	hletter4.pdf



[Instructions for use](#)

北海道大学学術成果コレクション

HUSCAPレター



HUSCAPとは

北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP) は、北海道大学の研究者や大学院生などが著した学術論文、学会発表資料、教育資料などを電子ファイルで保存しWebで公開するものです。誰でも、無料で読むことができます。

本紙面に掲載されている文献は、HUSCAPのWebサイトでご覧いただけます。

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/>

拝見します。「初めての論文」

第1回 中村睦男 北海道大学総長

「個人の人権は国に侵害されない自由だけでない。弱者に対しては国が生活や労働を保証する義務がある」という考えが歴史の中で生まれ、憲法にも定着しているのです

HUSCAPレターでは、今号から北大で活躍する研究者の「初めての論文」を紹介していきます。どんな研究者にも必ず、研究生生活の原点ともいえる論文があるものです。

研究生生活の初期に書かれた「初めての論文は」人目にふれる機会が少ないですが、研究者の足跡や時代の変化を知ることができます。これを手軽に見ることができるのもHUSCAPの大きなメリットの一つです。

記念すべき一回目には、中村睦男総長にご登場いただきます。

「全体的にはとても豊かになったのに、格差問題など新たな課題が生まれている」と語る中村総長 ▶



総長の「初めての論文」はどんな論文ですか？

私は1963年に北大法学研究科の修士課程を修了し、助手となりました。「初めての論文」は

その後、修士論文に加筆したものです。1789年のフランス大革命以後に制定された憲法の歴史をたどりながら、その中で社会権がどのよう

に考えられ、規定されてきたのかを調べ、紹介しました。

社会権とはどのようなものですか？

日本国憲法では基本的人権の尊重が定められています。基本的人権には自由権と社会権の二つがあります。自由権とは国が個人の自由を認め、尊重しなければならないとするものであり、社会権とは国民の、とりわけ弱者が国の救済を求める権利といえます。

社会権を研究テーマに選んだのはなぜですか？

社会権について研究している人が当時はまだ少なかったからです。フランス憲法を対象に選んだのは、フランスが大革命以後、世界で初めて人権宣言を発し、人権や憲法に関して長い伝統を持

つ国だからです。また当時の指導教官がフランス留学から帰ったばかりの人で、その刺激を受けたことも理由の一つですね。

総長にとって、社会権は生涯のテーマだったのですか？

2年間フランスに留学し、現地の空気にふれながら研究を進めました。帰国後、社会権に対する考えをさらに深めた「社会権法理の形成」という論文で博士号をとりました。自由権が発展して社会権がどのようにできてきたのか、社会権とはどのような権利なのかについて研究したものです。法学部に40年間在籍した中で、最後に書いた論文も社会権に関するものです。最終講義でも社会権についての研究を振り返りました。

弱者の抱える問題をどうにかしたいと思ったことが社会権研究の原点でした

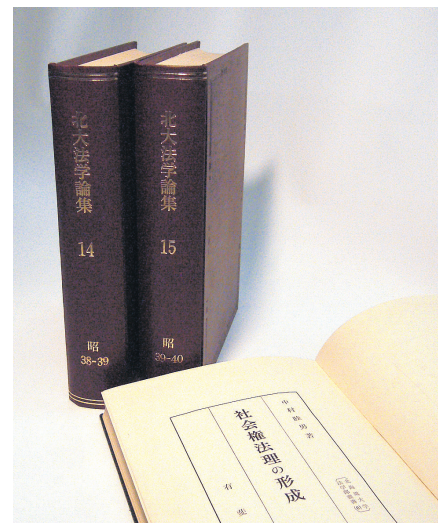
そもそも、社会権に関心を持たれたきっかけはなんですか？

私は小学校一年生のときに敗戦を経験し、多くの人が貧困や飢餓などに直面するようすを間近で見ました。親世代の苦労や、多くの孤児など弱者が抱える問題に対して「これではいけない」という意識が常に自分の中にあつたように思います。1960年代、ようやく日本の社会保障制度ができつつあった頃に、人権としての社会権について調べたいという気持ちを強くしました。

今、日本では社会権が尊重されていると感じますか？

1960年代から1990年代にかけて日本は高度成長をとげ、社会保障制度も充実しました。全体的にとっても豊かになったと感じます。しかし最近、社会全体のセーフティネットが壊れつつあり、格差が生まれるという新たな課題が出てきました。日本が福祉国家になる過程で、個人は国に頼りすぎ、国は個人の責任や自立性を尊重しなかった。その反動で個人の自主性、自己責任が問われるようになってきたのですが、その行き過ぎが格差を生んでいるのではないかと感じます。みんなが貧しかった時代とは違い、複雑な難しさがあります。また、一方で

多くの人がこの問題に対して無関心に見えることが気になります。



▲ フランス留学から帰国後に書かれた「社会権法理の形成」(1973年)

中村総長の「初めての論文」

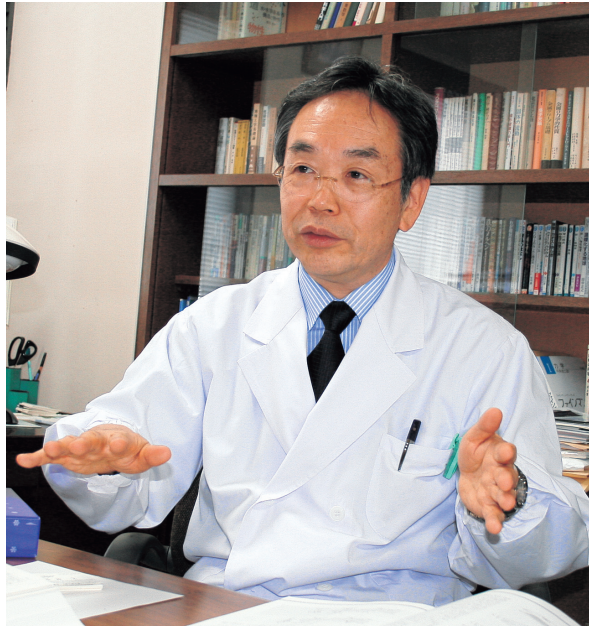
「フランス憲法における社会権の発展(1)~(3)」
北大法学論集14巻2号(1963年)、同15巻1号、2号(1964年)。
HUSCAPのWebサイトから見るすることができます。

こんなふうに使っていますHUSCAP

～①紀要の公開 低温科学研究所～

月平均100件のアクセスが

低温科学研究所の紀要「低温科学」は今号（第64巻）より、掲載全論文がHUSCAPに登録されました。この中で、本堂武夫教授の「氷の塑性異方性と転位：立方晶 I_h 構造がもたらす六方晶 I_h の特異な物性」は、約半年で705件のアクセスを記録しました。



▲「こんなに多くの人に読んでもらえたとは嬉しい驚き」と語る本堂教授

◀ 画面上で、印刷されたものと同じように読むことができ、拡大・縮小自在。プリントアウトもできます

2巻 氷系物質の物性研究フロンティア

氷の塑性異方性と転位 ～立方晶 I_h 構造がもたらす六方晶 I_h の特異な物性～

本堂 武夫 北海道大学

水の物性の中でもっとも顕著な異方性を示す塑性について、転位論に立脚して解説する。氷結晶を作っている水素結合の強さはどの方向にもほとんど同じであるにもかかわらず、氷はあたかも底面に積み重ねたトランプのカードのように、底面すべりだけが卓越して生ずる。それ以外の変形は禁止されているからである。その直後の原因は、氷結晶中の転位の特殊な性質にあるが、それをもたらし、六方晶である氷 I_h の中に潜む立方晶 I_c の構造である。この2つの結晶構造のエネルギー差が小さいために、転位は底面よりトロン状態に拡張して顕著な塑性異方性をもたらす。しかし、このような転位の挙動を詳しく見てゆくと、底面以外の面ですべり変形が活発に働いているという意外な側面がみえてくる。

1. はじめに—地球システムと氷—

現在の地球環境も気候も氷圏（Cryosphere）の存在なくしては語れない。特に、グリーンランドと南極に存在する巨大な氷の塊、氷床（ice sheet）は、地球システムの重要な構成要素である。現在の地球には、グリーンランドと南極にしか氷床が存在しないが、約2万年前の最終氷期最盛期（Last Glacial Maximum: LGM）と呼ばれる時代には、北米大陸の北半分を覆っていたローレンツド氷床やヨーロッパ北部のスカンジナビア氷床、南米パタゴニア氷床の存在が知られている。人類誕生以降の地質時代である第四紀の気候・環境は、このような氷床の変動すなわち氷期—間氷期変動によって特徴づけられる。この大規模な変動の周期は、ミランコビッチの10万年周期すなわち地球の公転軌道の変動周期に一致しており、日射量の変動がトリガーになっているとされている。日射量の変動自体はそれほど大きなものではないので、この大規模な変動を説明するためには、何らかの増幅装置が必要である。雪や氷は、太陽光を効率よく反射するので、寒冷化して地表や海面が氷で覆われると、ますます寒冷化が進むという正のフィードバック効果をもっている。したがって、氷床が拡大し始

うし、その逆であっても、今の地球とはまったく異なる様相になっていたはずである。固体の水が氷に凍くという特異な性質が様々な自然環境の成り立ちにとって重要であるように、固体の水がほぐれ凍きで流動的であることが、現在の地球環境の形成にとって重要であったに違いない。

氷の流動がニュートン流体のような線形流動に従うならば問題は簡単であるが、実態の水は、流動速度が応力のべき乗に依存する非線形流体である。しかも、氷結晶は、どの方向から力を加えるかによって変形速度が大幅に変わる。塑性異方性の極めて強い物質である。これまでに、多くの氷床流動モデルが開発されてきたが、塑性の異方性を取り込むまでには至っていない。いずれ、モデルの精密化が進むときに、塑性異方性をいかに取り込むかという問題は必ず解決しなければならぬ課題である。

通常の氷は、六方晶であり、この6回対称軸をz軸といい、これに垂直な面をz面あるいは底面という（z面という場合もある）、多くの実験が示すように、氷では底面すべりが卓越して生ずる。あたかも積み重ねたトランプのカードを滑らせるかのような変形をする。氷の結晶構造には、たしかに底面に沿う層構造を見ることができ、しかし、同様の層構造はプリズム面にもあるし、

●本堂教授にインタビュー

本堂教授の論文は、氷の結晶が変形しながら決まった方向にすべるメカニズムを研究した複数の論文を再構成して解説したものです。氷がすべるメカニズムは中谷宇吉郎博士の時代から疑問とされてきました。毎月平均100件ものアクセスを記録したことは「嬉しい驚き」であり、「専門は違うが、この問題に興味のある人に閲覧されているの

ではないか」と考えられるそうです。

今後、「低温科学」は創刊号から順次HUSCAPに登録される予定です。中谷宇吉郎博士などによる、低温科学研究所の草創期の研究成果も読むことができるようになります。本堂教授はHUSCAPについて、過去の論文や、二次情報など「普通には手に入らない文献を、自分の研究室で見られるというのが最大のメリットでは」と話されました。

HUSCAP掲載のメリット

これまで「低温科学」は冊子の形態で作成し、関連学部や研究者に配布していたため、読者も限られました。しかしHUSCAPに登録・公開したことで、検索エンジン経由での検索・閲覧が可能になり、本堂教授の論文以外も高頻度で閲覧されています。また、印刷部数を少なくできるため、費用や保管場所の節減につながります。

HUSCAPのお仲間探訪

電子アーカイブ(紙媒体の論文などを電子化し、保存・公開するもの)の作成が進んだことにより、最新の文献や、古い、希少な文献を手軽に見られるようになりました。

科学技術振興機構は、国内の学協会が発行する重要500誌の全アーカイブ化を目指し、電子ジャーナルを公開しています。

●誰でも読める論文サイト

科学技術振興機構では、学会が編集する論文集・ジャーナルや、科学技術情報の電子化を支援し、Web上で公開してきました。その技術を生かし、昨年3月から紙媒体のジャーナルを創刊号から網羅的に電子化し公開するJournal@rchive(ジャーナルアーカイブ)をスタートさせました。

●湯川博士などの貴重な論文も

すべての学術雑誌を一度に電子化するのには困難です。そのため、有識者による外部選定委員会が一昨年9月に74誌、昨年7月に65誌を選定。順次アーカイブを行い、公開しています。

現在ダウンロードできるアーカイブには、故湯川秀樹博士の中間子理論の論文をはじめ、朝永振一郎、野依良治など著名な研究者の論文が含まれます。中でも世界的な粘菌学者であった南方熊楠の「本邦産粘菌類目録」は、熊楠が大英博物館に寄贈し、イギリスの「ジャーナル・オブ・ボタニー」などに紹介された粘菌をリストアップしたものです。1908年に発表されたこの論文が電子化されていることに感動を覚える方も多いことでしょう。

●海外からのアクセスが多い

昨年9月のページビューが約40万件/月、ダウンロード数が約18万件/月、それが10月にはそれぞれ約62万件/月、約28万件/月と、アクセス数は急増しています。また、アクセス元は中国が最多で、アメリカ、日本、ロシアが続きます。

(317) 號十六百二第誌雜學物植	
本誌第二百三十五號一八一八二頁ニ、明治三十九年、千 ター氏親子ガ檢シテ、新タニ日本ニ産スルコトヲ知ルニ及ベ 菌ニシテ、兩氏ノ鑑定ヲ經タルモノ、更ニ三十八種ヲ増セリ 發見ノ新種一、新變種若干アリ、左ニ目錄ヲ具シテ同好ノ 八九四年版行)同、英國粘菌子引草(一九〇五)再版、リステ 篇ト、予ニ宛タル數回ノ書信、及ビ本誌二百一十一號、草野氏 昨年五月ノ「リステ」ニ掲ケタル、リステ一親子合作ノ粘 菌ヲ用テ産地ヲ示スコト左ノ如シ、又希品ト異様ノ品ハ、 (東) 東京、草野氏所集ニ係ル、(小) 小笠原島、 此他ハ總テ予ガ紀州ニテ明治三十三年以降見出シタル者ニテ (和) 和歌山市、(荒) 同市近傍荒濱、(歌) 和歌浦、(月) 月 (淡) 淡村(西ノ谷村) 鈺山、(瀬) 瀬戸、(神) 神島、 1. <i>Gordonia mucida</i> Schaefer var. <i>jejunica</i> (和) 神島、 " " var. <i>kanouae</i> (瀬) 瀬戸、 " " var. <i>poroides</i> (天) 2. <i>Berkonia hypidus</i> Berk. var. <i>japonensis</i> (那)	植物學雜誌第二十一卷 第二 ○本邦産粘菌類目録

本邦産粘菌類目録(植物学雑誌第22巻 1908年)

科学技術振興機構

Journal@rchive(ジャーナルアーカイブ)

URL:<http://www.journalarchive.jst.go.jp/>



編集後記

HUSCAPレターは、今号より紙面をリニューアルしてお届けします。今回は、中村総長の「初めての論文」をご紹介します。「弱者が抱える問題をどうにかしたい」という、社会権研究の「原点」を感じていただけましたでしょうか。このHUSCAPレターをきっかけにWebサイトを見ていただくことで、より多くの研究成果が集まり、活用されることを願っています。

HUSCAPレター 第4号 2007年1月発行
 発行:北海道大学附属図書館
 制作:北海道大学科学技術コミュニケーション養成ユニット
 (担当受講生:原林滋子・立花浩司)

HUSCAPへの登録方法についてはWebサイトをご覧ください。
 下記へお問い合わせください。
 北海道大学附属図書館 情報システム課
 内線:2564/2524 E-mail:repo@lib.hokudai.ac.jp